

本願寺と法界寺

ところで、本願寺は、こうした法界寺に対してどうしているのかと申しますと、法界寺は日野家の菩提寺であり、聖人ご誕生のところでありますので、もちろん関心を持っていたので、法界寺が庫裡を造営した時援助したこともあります。今からおよそ160～170年前、文政という頃になりますと、法界寺の方から本山へ出入りしたいと申し出てきます。

それは館入りという形です。館入りと申しますのは、大名でいいますと、家来でもなく、またお客でもない待遇をすることで、例えばお医者さんとか絵描きさんとかいう類は、こうした待遇を受けていました。早い話が、家来とお客との中間で、正月とか盆には挨拶に参りますので、そうした時には御祝儀を上げるという具合に、多少の物を与えて生活を助けるという具合で、それがいわゆる館入りであります。本願寺は門跡寺院でありますので、そうした身分で出入りする者がいたのであります。法界寺も本願寺に対して、そうした形で出入りするようになったのであります。それは、本願寺で申しますと、本如上人という御門主の時代で、幕末に近い頃のことであります。

本山では、その前に三業惑乱という宗義安心についての大変な騒動がありました。また、浄土宗との間には、浄土真宗という宗名についての争いがあり、真宗各派が合同してこれに当るといふ大きな事件もあったのです。これらはみな江戸幕府、寺社奉行の決裁を受けましたので、大変な困難であり費用もかさんで、大いに難儀をしたことであります。本山としましては、そういう時代のことであります。

法界寺が館入りを願い出たのは文政9年(1826)のことですが、本山ではこれより先、長門常元寺の速満坊僧糠や美濃専精寺の正聚坊僧純等に命じて、この地における有範卿や聖人のご旧跡を調べさせていました。この法界寺の東の方に

日野家のお墓があり、有範卿夫妻や聖人の御分骨という墓石がありますが、それらを僧糠が調査した記録があります。また、法界寺の内裏の芝という所、100余坪が、日野家の別邸の地であることも、この時明らかにしていたのであります。

そこで、法界寺から出した当時の記録によりますと、この時、法界寺側は樹下坊、井眼坊、梅本坊等10坊が連署して願い出ていますので、この頃法界寺内には10坊ばかりの塔頭があったようであります。それはともかく、本山では、この願いを認めることになりました。そしてこの時、法界寺は今申しました日野家由緒の内裏の芝100余坪を本山へ献上するということになりました。もっとも献上といっても、これは実は、一度本願寺が買い上げ、それを再び法界寺へ下げ渡し、その上で法界寺が本山へ寄贈するという次第で、結局本山が買い上げたわけであります。こうして万事交渉ができて、文政9年の7月に法界寺が本山へ参り、雁の間で本山重役と面会、色々お扱いを受けました。

当時は何分御旧跡が問題になってきた時代でありますので、この法界寺の由緒の地についても、お東の本山でも関心を持っていたようでありますし、伊勢の高田派も同様でありまして、共に多少交渉があった形跡があります。そこで、この地が我が本派のものになったについては本如上人を初め、関係者の苦心が色々あったことを忘れてはならないと思います。なお、この法界寺の館入りと雁の間の待遇は、明治の明如上人の時代まで続きましたので、その後は交際寺院ということになりました。(宮崎円遵)

